様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：若手研究
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１３８３１

研究課題名（和文）うらみをもつストーキング加害者の心理的特徴の検討

研究課題名（英文）Psychological Characteristics of Stalking Perpetrators with Urami

研究代表者
鈴木　拓朗（Suzuki, Takuro）

富山大学・学術研究部人文科学系・講師

研究者番号：４０９０８６７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：うらみを抱いた経験がある男女を対象としてウェブ調査を実施し，テキストマイニングを用いて現代の人々が抱くうらみの概念を明らかにした。その結果，「悲しみ」がうらみの中核的特徴であることが新たに示された。続いて，うらみの背景にある心理的苦悩とストーキング関連行動の加害内容との関連性について調査し，テキストマイニングを用いて検討した。その結果，暴力あり群，接近行為のみ群，いずれも行わなかった群それぞれに関連する特有の心理的苦悩があることが見出された。本研究によってストーキング加害者に対して効果的な支援法としてマインドフルネスの視点を提案することができ，加害者臨床の焦点や方向性を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
昨今では，ストーキング加害者に心理学的アプローチを行い，加害を防止することが求められているが，その有効な介入法については知見が乏しい状況であった。そこで，本研究はストーキング関連行動に関連するうらみの特徴として，その背景に内在する心理的苦悩に注目し，特に暴力的なストーキング関連行動と関連する加害者の心理的苦悩を明らかにした。これらの知見は，支援者が加害者の心情を理解することや，介入の方向性を検討する際の手助けになると期待される。さらに，マインドフルネスや適応的諦観の視点を介入法として提案したことで今後の加害者臨床の発展に寄与し，被害拡大を防止することに繋がることが期待される。

研究成果の概要（英文）：A web survey was conducted targeting both men and women who have experienced urami, utilizing text mining to elucidate the contemporary conceptualization of urami. As a result, "sadness" was newly identified as a core characteristic of urami. Subsequently, the relationship between psychological distress underlying urami and stalking-related behaviors was investigated using text mining. The results revealed specific psychological distress associated with each group: those with violence, those with proximity behaviors only, and those with neither. This study suggests mindfulness as an effective approach for stalking perpetrators, offering insights into the clinical focus and direction for perpetrator intervention.

研究分野：臨床心理学，犯罪心理学

キーワード：ストーキング　ストーカー　うらみ　苦悩　テキストマイニング　マインドフルネス　加害者臨床

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年，ストーキング被害に関する相談件数は増加傾向にあり，深刻な社会問題となっている（警察庁，2021）。特に，怨恨の感情（うらみ）をもつストーキング加害者は粗暴で攻撃的な行動を実行しやすいことが示されている（鈴木，2020）。ストーキング防止のためには，加害者に心理的アプローチを行う必要があることが指摘されているが（内閣府男女共同参画局，2017），加害者のどのような側面に焦点化することが有効なのかは検討が不十分な状況である。諸外国では，加害者が抱く動機づけとストーキングとの関連を検討するものはあるが，うらみや復讐心が暴力や脅迫行為などの攻撃的なストーキングにつながることを示すにとどまっており（鈴木，2020; Thompson, Dennison & Stewart, 2012），具体的にどのような思考や感情がどういった行動を引き起こすのかについては曖昧な状態である。特に，うらみを抱く加害者の心理的特徴について実証的に検討した例は寡少である。そこで，本研究では，うらみをもつストーキング加害者に注目し，加害行為につながる心理的なリスク要因を明らかにすることを目的とした。

研究知見を深刻化する前の予防対策につなげるためにも，事件化していない加害事案にも注目することが有用である。また，ストーキングを定義するうえで「相手が求めていない，望まれない行動である」ということは重要な要素であることが指摘されている（鈴木，2020）。さらに，本邦のストーカー規制法において好意を寄せる相手に対するストーキングが扱われていることや，加害者が元交際相手である場合に暴力リスクが高いこと (e.g., McEwan et al., 2017; Rosenfeld & Lewis, 2005) を踏まえ，本研究では「元交際相手に接触を拒まれたにもかかわらず，その相手に向けて行なわれた物理的・非物理的な接近行為」と定義されたストーキング関連行動（Stalking-Related Behavior; SRB；鈴木，2021）に着目し，事件化の有無に関わらず，うらみを抱いて SRB を実行した加害者を研究対象とした。

２．研究の目的

研究開始当時の目的について説明する。うらみを抱く SRB 加害者のリスク要因を検討するうえで，うらみという心理的状態を理解することが重要である。うらみの実証研究は非常に少ないが，鈴木（2019）において，うらみ体験の心理的構造に関する理論モデルが見出されている。しかし，このうらみの理論モデルは少数の事例を対象とした質的分析に基づいており，その妥当性は十分に確かめられていない。そこで，本研究ではまず十分なサンプルサイズを用いて鈴木（2019）のうらみの理論モデルの妥当性を統計的に検証することを目指した（研究 1）。

次に，見出されたうらみの理論モデルに関する知見をもとに，ストーキング加害者が抱くうらみのどのような側面がどのようなストーキングに影響を与えるのかについて検討し，リスク要因および予防対策についての知見を得ることを目的とした（研究 2）。その際，要因間の統計的な解析に加え，加害当時の体験についての語りデータも収集して質的に分析し，加害行為に至るまでの心理的な背景についての一般的な知見を生成することを目指した。

３．研究の方法

本課題では 2 つの研究を行った。いずれもインターネットを通じてアンケートの参加を呼びかける業務委託サービス（クラウドソーシング）を提供するクラウドワークスを用いてウェブ調査を行った。あらかじめ調査対象となる条件を提示し，あてはまる場合のみ回答するよう教示した。

４．研究成果

【研究 1】

（1）目的

実際にうらみを感じたことがある者を対象とし，現代の人々が持つうらみの概念，およびうらみが生じた状況の特徴を，テキストマイニングを用いて探索的に検討することを目的とした。

（2）方法

①研究参加者

研究参加者は成人期に当たる 20 歳から 39 歳の一般男女とした。調査前に，「他者にうらみを感じた経験がある」という条件に当てはまる場合のみ回答するよう教示した。最終的に，596 名（男性：n = 295，age M = 32.64，SD = 4.77；女性：n = 301，age M = 32.15，SD = 5.25）が分析対象となった。

②調査内容

1）うらみの概念：「『うらみ』とはどのような気持ちだと思いますか？ あなた自身の考えを，『うらみとは』の後に続く形で自由にご記入ください。」 と説明し，「うらみとは―」という空欄を用意して回答するよう教示した。

③分析方法

テキストマイニングによる分析を実行するソフトとしては，KH Coder（樋口，2004；2020）を使用した。うらみの概念と状況それぞれのデータにおける頻出語を算出し，多く用いられていた

語から中核的な特徴を探った。次に，うらみの概念および生起状況について説明した語を，多次元尺度法を用いて関連が強いもの同士でいくつかのクラスターに分類した。なお，多次元尺度法では Kruskal 法を用いて，距離の計算には Jaccard 係数を採用した。最後に，クラスター間の関係性を探るために，各クラスターに属している語の出現文書数の平均値を比較し，用いられやすいクラスターを検討した。

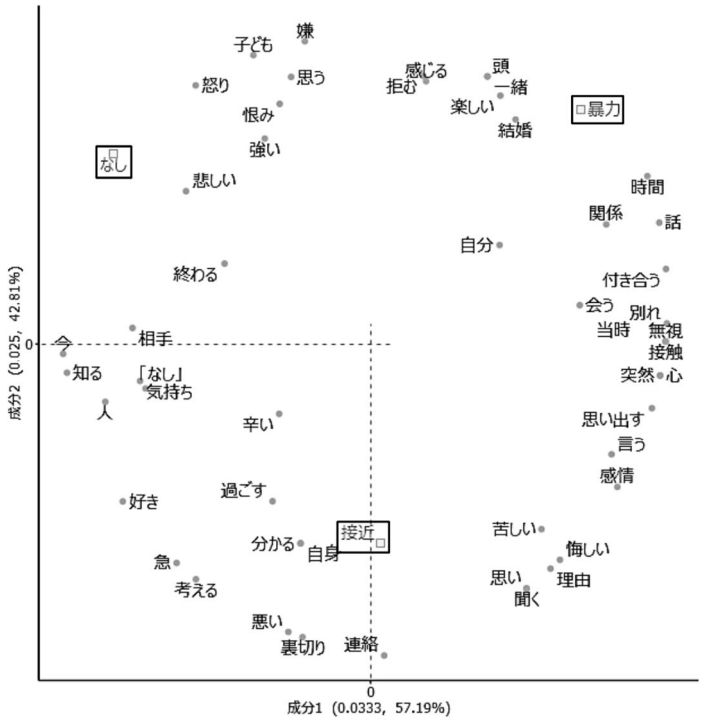
（3）結果

①多次元尺度法

うらみの概念と生起状況についての質的データをテキストマイニングによって解析し，多次元尺度法でクラスター化した結果，4 つのクラスターにまとめられた（Figure 1）。第 1 クラスターは「怒り」「憎しみ」「悲しみ」といった感情を示す語，および「被害」などで構成されており，他者の言動によって被害を受けたと感じ，怒りと悲しみをともに抱くことを示していると解釈された。第 2 クラスターは，「許す（許さない）」「傷つける」「理不尽」「続く」などによって構成されており，他者の理不尽な行動によって精神的に傷つき，その相手を許せなく思う持続的なネガティブ感情を示していると解釈された。第 3 クラスターは「裏切る」「殺す」「不幸」などで構成されており，他者の裏切りによって起こるその相手への殺意や，相手の不幸を願う気持ちを示していると解釈された。第 4 クラスターは「忘れる（忘れない）」「消える（消えない）」「辛い」などから構成されており，うらみに思う気持ちやそのきっかけについて忘れることができないこと，記憶から消えることはないと思うことなど，うらみの持続性による精神的な辛さを示していると解釈された。

Figure 1

うらみ概念に関する多次元尺度法の結果



②クラスター間の出現文書数の比較

抽出されたクラスターごとに構成している語の出現文書数の平均値を算出した。一元配置分散分析，および Tukey 法を用いて各クラスター間の平均値を比較したところ，第 1 クラスターが他のクラスターよりも出現文書数の平均値が高かった（F（3，44）= 8.08，p < .001，η^2 = .36; Table 1）。

Table 1

うらみの概念に関するクラスター間における語の出現文書数の差の分散分析

	第1クラスター（n=13）		第2クラスター（n=13）		第3クラスター（n=10）		第4クラスター（n=12）		F	η^2	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
出現文書数	65.15	58.77	17.62	13.17	13.20	10.78	11.75	5.08	8.08 ***	.36	第1＞第2，第3，第4

nは当該クラスターを構成する語の数。***p < .001

（4）考察

第１クラスターには，うらみの近縁概念とされている「怒り」や「憎しみ」（鈴木他，2017）に加え，「悲しみ」と「被害」も含まれていた。このことから，うらみの心情には，これらの心理的な苦悩が伴うことが想像される。また，第１クラスターは他のクラスターよりも，構成されている語の出現文書数の平均値が高く，第 1 クラスターの語を用いる人が相対的に多いことが示唆された。このことから，第１クラスターはうらみの概念の中核的な特徴を示していると考えられる。

【研究 2】

（1）目的

うらみには心理的苦悩が伴うことが示され，これが拒絶体験後のストーキング関連行動の発現に影響を与えているのではないかと推察された。そこで，交際相手または配偶者から拒絶を受けた経験によってうらみを抱いた者が，どのような苦悩を抱えており，それがどのような加害行為につながっているのかを明らかにすることを研究 2 の目的とした。

（2）方法

①研究参加者

「過去 5 年以内に交際相手または配偶者から別れを告げられ，接触することを拒まれた経験があり，そのことで相手にうらみを感じたことがある」という条件に該当した 20 歳から 49 際の男女 567 名（男性：n = 255，age M = 35.88，SD = 7.71；女性：n = 292，age M = 34.16，SD = 7.18）が分析対象となった。

②調査内容

1）苦悩：接触を拒まれて相手に恨みを抱いているときにつらい気持ちや苦しい気持ちになったかどうかを尋ね，該当する場合はどのようなことがつらかった，または苦しかったのか詳しく回答するよう求めた。また，つらい気持ちなどにならなかった場合は，「なし」と回答するよう教示した。

2）ストーキング関連行動（SRB）： SRB に関する項目の作成においては測定対象の妥当性を担保するため，SRB の行動内容リスト（鈴木，2020）を参考にして，暴力行為について 3 項目，それ以外の接近行為について 15 項目を作成した。そして，相手から接触を拒まれた後，その相手に対してどの程度これらの行動を行ったのか，それぞれについて「0 回」「1 回」「2～3 回」「4～9 回」「10 回以上」で回答するよう求めた。

③分析方法

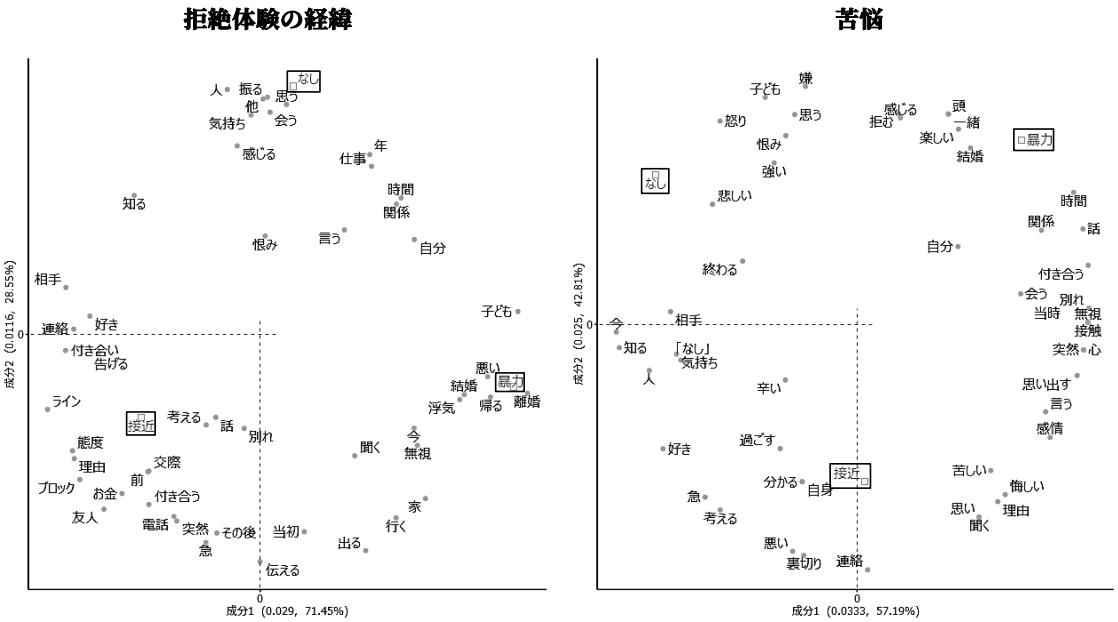
テキストマイニングによる分析を実行するソフトとしては，KH Coder（樋口，2004；2020）を使用した。拒絶体験後の苦悩の説明に用いられた語について，対応分析を用いて SRB との関連性を検討した。ここでは，SRB のうち暴力行為を一度でも実行したことがあると回答した者を「暴力あり」，暴力行為以外のつきまとい行為を一度でも実行したことがある者を「接近あり」，SRB をいずれも実行したことがない者を「実行なし」とした。対応分析においてこの SRB に関する変数を外部変数として使用し，これらと関連性が高い特徴的な語から加害行為に関わる苦悩を探った。

（3）結果

苦悩の自由記述データについて対応分析を行った結果を Figure 2 に示した。

Figure 2

拒絶体験の経緯と苦悩についての対応分析の結果



（4）考察

拒絶体験後に SRB を実行しなかった者の拒絶体験の経緯としては，相手が他の人に恋愛感情を抱くようになり，別れを告げられたという出来事が関係していることが示唆された。「別れる理由がわからない」ということが関連している「接近あり」の特徴と比較すると，「実行なし」の者は相手が別れたいと考える理由をある程度認識できている，あるいはそれを受け入れることができているのではないかと考えられる。また，「実行なし」の者が抱く苦悩は何らかの SRB を実行した者と比べて，「悲しみ」「怒り」「恨み」といった簡潔な感情語で表現されやすいことがうかがえる。「実行なし」は他の群と比べて，このような自身の感情を同定し，言語化する「感情への気づき（emotional awareness; Lane & Schwartz, 1987）」の能力が高かったため，自身の感情を適切に制御することができ，相手が望まない不適切な接近行為を抑えることができたのではないかと推察される。加害者への心理支援においては，まず本人の感情を内省，言語化することをサポートし，喪失感や孤独感と向き合ったうえで，適切な感情制御方略に繋げていくことが，再加害の防止に効果があるのではないかと考えられる。

暴力行為以外のつきまとい行為を実行した「接近行為あり」の者は，関係破綻の過程において，金銭に関わる不満やトラブルが生じている傾向があり，こういった問題が解決されないまま連絡がつかなくなることによって，裏切られたと感じるのではないかと想像される。これは一種の被害感が伴っているとも言えよう。加害者の心理支援においては，このような加害者の中にある被害者性にも着目し，苦悩の軽減に努めることが望まれる。

暴力行為に及んだ者は，相手から浮気や無視といった仕打ちを受けた末，離婚や結婚を前提としていた交際関係の破綻を経験していた傾向があることが示された。さらに，関係継続時のともに過ごした楽しかった頃を思い出すことも，当人の苦悩に結びついていた。このことから，暴力行為ありの者は，それ以外の群と比べて，関係継続時における相手との親密性が比較的高い傾向にあることがうかがえる。ある程度の時間をかけて関係を進展させていったにもかかわらず，関係破綻に至ってしまったために，そのような苦悩が生じたのではないかと想像される。

山野（1989）は，甘えを成熟した方法によって諦めたり克服することができれば，「うらみ」は解消されていくと指摘している。拒絶体験に伴う恨みを解消に導く視点として，適応的諦観が挙げられる。菅沼・中野・下山（2018）は，元来ネガティブな側面に注目されがちな諦めについて，精神的健康にポジティブな影響を与える側面に注目して適応的諦観という概念を提唱している。適応的諦観はマインドフルネスにおいても重視されており，これを促す介入を行うことによって，被害者への満たされない甘えを諦め，それを受容し，加害者の恨みが解消され再犯を防止することにつながるのではないかと考えられる。これは，暴力ありの者だけでなく，接近行為のみが見られた者に対しても有効なのではないかと想像されるが，介入効果については今後の実証的な検討が求められよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 鈴木拓朗	４．巻 -
２．論文標題 ストーキング関連行動を実行した者が抱える苦悩の検討	５．発行年 2024年
３．雑誌名 犯罪心理学研究	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木拓朗	４．巻 30
２．論文標題 テキストマイニングを用いたうらみの概念とその生起状況の検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 感情心理学研究	６．最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4092/jsre.30.2_23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鈴木拓朗
２．発表標題 テキストマイニングを用いたストーキング関連行動の加害者が抱く苦悩の検討
３．学会等名 日本心理学会第87回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関